

## 平安京北郊にあった雲林院の発展と衰退

片 平 博 文\*

### I. 歴史と文学の舞台

平安京の北郊は、平安時代の初期から天皇の遊猟やその他の行幸の場所として広く知られていた。その中でも雲林院は、淳和天皇による紫野院の創設以来、離宮として、また宮廷人による漢詩や和歌を詠む舞台として、さらには風雅な音楽を奏でる場所として、しばしば歴史や文学の中に登場する。例えば、菅原道真によって編纂された『菅家文草』や、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』などが、その代表的なものとなろう。しかし、やがて雲林亭から雲林院へとその名が変わるに伴い、元来有していた機能の上に、宗教的な要素が次第に色濃く重ねられていくことになった。

『源氏物語』の「賢木」では源氏が参籠する場面に、また『栄花物語』の「みねの月」では三条天皇の皇后だった城子崩御の場面に、さらに『大鏡』の冒頭部では菩提講の場の中で、それぞれ雲林院が描かれている。そのほか、『蜻蛉日記』『枕草子』『今昔物語』などの作品中にも雲林院が登場する。このように雲林院は、とくに平安時代の初めから中期にかけて、平安京北郊における重要な文化的・宗

教的な拠点であったばかりか、長い期間にわたって注目されてきたランドマークの1つでもあった。

ところが平安時代後期に衰退した後は、地名・集落名として雲林院の名は存続したもの、歴史や文学の表舞台から遠ざかり、かつての実際の規模もその具体的な場所についても、最近になるまで正確なことが分からないままとなっていた。その解明に取り組んだ基本的な先行研究として杉山<sup>1)</sup> や柴田<sup>2)</sup> らの論考があげられるものの、まだ決定的な場所の特定までには至っていないというのが現状であった。こうした状況を大きく変えるきっかけとなったのは、京都文化博物館によって2000年に実施された京都市北区紫野雲林院町の発掘調査である<sup>3)</sup>。この調査によって、平安時代以降における雲林院東部のようすの把握と、そこにあった紫野院起源の「釣台」と考えてもよい掘立柱建物や、園地遺構が発見され、またそれらが機能していたおおよその年代も特定されるに至った。

小論では、この発掘成果を基礎として、歴史地理学的方法を用いながら、雲林院の具体的な規模の解釈やその場所に立地する意味、平安京との位置的な関係等について考察を進め、

---

\* 立命館大学文学部

キーワード：雲林院、復原、平安京、歴史地理学

Key words : the *Urin-in* Imperial Villa, Reconstruction, *Heiankyo*, Historical Geography

船岡山や堀川、有栖川などの自然景観、知足院、斎院などの施設を含めた平安京北郊の風景を正確に把握する分析の第一歩としたい。

## II. 雲林院の盛衰

### 1. 雲林院の発展—9～10世紀のようす—

雲林院の前身である紫野院の存在が初めて確認されるのは、淳和天皇天長6年(829)10月10日のことである。この日天皇は、北郊の深泥池に出かけて水鳥の遊猟を行った後で紫野院に立ち寄り、雅楽を楽しんでいることから、すでにこの時点で紫野院が一定の完成をみていたことは間違いない。

第1表はその天長6年以降、9～10世紀にわたって雲林院が登場する古記録の記事を時系列に沿ってまとめたものである。表中の記録1～14から、雲林院がしばしば行幸先として利用されていたことや、平安京北郊の自然の中で風雅を楽しむ場所であったこと、紫野院から雲林亭を経て雲林院に名称が変更されたことなどが分かる。この新たな呼称からも、すでに仏寺としての性格の現れが示唆されるが、宗教的な性格を持ったことが確実に知られるのは、仁明天皇の命日に読経を命じた仁和2年(886)の記録15である。これ以降、御願寺としての色彩はますます強くなっていく。ただ、寛平8年(896)閏正月6日の宇多天皇による行幸(記録17)に従った中で、雲林院を題材とした「扈從雲林院、不勝感歎、聊叙所観。并序」(巻6-431)<sup>4)</sup>と題する漢詩を詠んだ道真は、「雲林院は昔の離宮なり。今は仏地と為る」としてここが宗教的な場所であることを強調しながら、一方で翌朝の情景を詠んだ「行幸後朝、憶雲林院勝趣、戲呈吏

部紀侍郎」(巻6-432)<sup>5)</sup>では、すぐれた景色は風雅の情趣にあたるとして雲林院の風景のすばらしさをたたえている。また、この行幸の時に詠んだとされる御製「閏月戊子日、遊覧雲林院、因題長句」(参考附載677)<sup>6)</sup>などにも、雲林院の情趣が具体的に述べられている。風雅を楽しむ場所としての雲林院の位置づけは、例えば11世紀に入っても、「雲林院西洞遭雨」(藤原明衡、巻2)、「雲林院花下言志」(大江佐国、巻3)、「春日遊雲林院西洞」(藤原明衡、巻10)、「雲林院眺望」(藤原茂明、巻10)、「雲林院即事」(同、巻10)、「秋日遊雲林院」(藤原明衡、巻10)、「雲林院西洞惜残秋」(藤原実範、巻10)、「冬日雲林院即事」(中原広俊、巻10)、「春日遊雲林院」(源経信、巻10)など、『本朝無題詩』<sup>7)</sup>の中に多数認められる。同様の詩はまた、「冬日於雲林院西洞同賦境静少人事」(源道済、巻下)のように、『本朝麗藻』<sup>8)</sup>においても確認することができる。このように仁和年間以降、少なくとも11世紀前半までの長い期間にわたって、雲林院は2つの機能を併せ持った場所として発展していった。

しかし第1表からも明らかであるが、不思議なことに雲林院に関する古記録の記述は、10世紀に入ると約50年間にわたって突然途切れてしまう。すなわち、昌泰元年(898)から天暦7年(953)までの確実な記録が全く見いだせないのである。先の発掘調査によると<sup>3)</sup>、雲林院の領域の東部には建築年代の異なる南北2つの掘立柱建物が見つかっている。建物は南側のものがより古く(平安京土師器編年のⅡ期古段階(実年代840-870年頃)まで)、北側のそれは同Ⅱ期新段階(同900-930年頃)の遺物を柱堀方に含んでいることから、

第1表 9～10世紀における雲林院

記録	西暦	和暦	和暦月日	出典	記事	雲林院を中心とした内容
1	829	天長6	10月10日	日本紀略	幸泥瀋池、羅瓶水鳥、御紫野院、…日暮、雅楽奏音聲	深泥瀋池で遊猟の後、紫野院に行幸
2	830	天長7	4月12日	日本紀略	御紫野院釣台、観遊魚	淳和院、紫野院で遊覧を観る
3	830	天長7	10月5日	類聚国史	車駕幸北野、……御紫野院	淳和院、紫野院に行幸
4	831	天長8	10月14日	日本紀略	幸北野、便御紫野院、奏音楽	淳和院、紫野院に行幸
5	832	天長9	4月11日	日本紀略	幸紫野院、御釣台、院司献物、命文人賦詩、御製亦成、……以為雲林亭	淳和院、紫野院に行幸
6	832	天長9	4月14日	日本紀略	皇后幸雲林亭、觀農業之風、賜宸從五位已上被、六位已下及類田之男女等録	皇后、雲林亭に行く
7	832	天長9	9月26日	類聚国史	乘興幸北野、試鷹犬、獵雙岳及遊野、幸雲林院	雲林院に行幸
8	834	承和1	10月5日	日本紀略	後上天皇(淳和)幸雲林院、遊獵北郊	雲林院に行幸
9	835	承和2か		文徳実録	関雄亦能草書、南海雲林阿院壁、皆令関雄書之也(仁壽3年2月14日朱)	藤原国雄、南海・雲林阿院の壁を書く
10	844	承和11	8月13日	日本紀略	幸北野、駐蹕於雲林院、覽地塘、宴群臣、日暮還宮	仁明天皇、雲林院に行幸
11	868	貞観10	8月27日	菅家文章	為顔正尹親王先姉紀氏修功德願文(卷11-641)	雲林院は、常康親王の幽荘である
12	869	貞観11	2月16日	三代実録	以此院、付囑遍照(元慶8年9月10日朱)	雲林院、常康親王から遍照に譲られる
13	873	貞観15	5月18日	菅家文章	為大藏大丞藤原清瀬、家地施入雲林院願文(卷11-645)	雲林院は、遍照の地である。
14	884	元慶8	9月10日	三代実録	權僧正法印和尚位遍照奏言、雲林院者、故无品常康親王之旧居也	雲林院はもと、常康親王の旧居だった
15	886	仁和2	4月3日	三代実録	勅令雲林院、毎年三月廿一日仁明天皇忌日、軋四卷金光明経…	雲林院に勅、毎年仁明天皇忌日に読経を命じる
16	886	仁和2	8月9日	三代実録	勅以雲林院安居譜、預元慶寺階業之例、以彼院為元慶寺別院也	雲林院を以て元慶寺の別院とする
17	896	寛平8	閏1月6日	日本紀略	天皇為遊覧、幸北野、午炮先御各流(斎院)幸雲林院	宇多天皇、雲林院に行幸
18	898	昌泰1	秋/冬	菅家文章	和由律師桃源仙丈之歌(卷6-450)	宇多天皇、雲林院に行幸
19	9c末			古今和歌集	古今和歌集(6歌)卷2春下(3)、卷5秋下、卷8離別、卷15恋	承均法師、素性法師、僧正遍照らの歌
20	953	天曆7	1月8日	河海抄	於雲林院、令轉大般若	雲林院にて読経
21	953	天曆7	2月18日	扶桑略記	詔、於雲林院、始奉造御願小多宝塔八基中佛像	雲林院に始めて御願の小多宝塔を造る
22	959	天徳2	12月10日	東南院文書	尋事案内、東大寺、修理職、冷泉院、雲林院等料材木、各給官符、造運件杣	雲林院の造材に玉瀧杣の木が使われる
23	960	天徳3	12月26日	東南院文書	今修理職、冷泉院、雲林院等料数千材木、造運件和之間、樹木漸盡残木非幾	雲林院の造材に玉瀧杣の木が使われる
24	960	天徳4	2月24日	扶桑略記	新立雲林院御願塔心柱…修御誦経	雲林院に御願塔の心柱を立てる
25	963	応和3	3月19日	日本紀略	公家供養雲林院多宝塔、奏音楽歌舞、寺别当以下有賞	雲林院多宝塔の供養が行われる
26	964	康保1	1月19日	伊呂波字類抄	雲林院 三綱供料	雲林院に三綱供料
27	964	康保1	秋か	蛸蛸日記抄	さるべきやうありて、雲林院に候ひし人なり	雲林院に仕えていた人が亡くなる
28	967	康保4	5月14日	河海抄	始從今日、於真言院、東寺、雲林院、……講仁王経限廿日竟之、為息災也	御息災のため、雲林院などで仁王経を講ず
29	968	安和1	5月20日	日本紀略	是日、於雲林院被修先皇(村上)周忌御斎会	雲林院にて先皇(村上)周忌御斎会を修す
30	980	天元3	5月25日	日本紀略	村上国忌也、於雲林院親王等修善報	雲林院にて法会を修す
31	982	天元5	2月4日	小右記	於雲林院以定寛令修五十ヶ日御修法如何	雲林院にて五十ヶ日御修法を修す
32	985	永観3	2月13日	今昔物語	院は、雲林院の南の大門の前にして御馬に奉て、紫野に御まし着たれば、	円融院、子の日遊びで雲林院前を経て船岡へ
33	987	永延1	5月5日	小右記	於雲林院、鎮名徳令行講演、号請轉法輪講云々	雲林院にて轉法輪講が催される
34	987	永延1	5月6日	小右記	今日右近荒手結、墨五十延送雲林院、是棒物料也	雲林院に墨五十延を送る
35	989	永延2	12月17日	小右記	下給雲林院申加奉文、無度縁文	円融天皇、雲林院に加奉文、無度縁文を下し給う
36	989	永祚1	6月24日	小右記	定寛阿闍梨年来籠居雲林院	雲林院に定寛が籠居
37	999	長保1	7月27日	小右記	右大臣内房周忌法事、於雲林院修之	雲林院にて右大臣内房の法会を行う

その頃に創建されたものと推定されている。そうだとすれば、北側の建物に相当する時期の記録が全く残されていないことに若干の疑問が残る。いずれにせよ、同Ⅲ期古段階(930-970年頃)には付近の井戸が廃棄されている事実を考慮すれば、雲林院の機能の中心はすでに10世紀の半ば頃には、後に「西洞」と呼ばれる西側の方に移りつつあったものと解釈することも可能となる。そのことを裏付けるかのように、天暦7年以降、10世紀後半を通じて御願寺としての行事、高級貴族や僧侶による参籠・法会に関する記述が相次いで見られるようになる(記録20～37)。また、『山城名勝志』が引く『徳治三年沙門願蓮勸進ノ詞』<sup>9)</sup>によれば、「寛和暦におよひて一の梵宇をひらき念仏寺となつけ安置の本尊は伝教大師の造弥陀佛供養の唱導楞嚴先徳云々、其より後毎月朔の期をむかへて菩提講の勤いたす、彼の式文は恵心の製作云々」とあって、有名な雲林院の菩提講が始まったのも10世紀後半にあたる寛和年間(985-87)のこととされている。

10世紀の前半を通じて記録がまったくないため、雲林院がどのように利用されていたのか明らかではないが、少なくとも9世紀末の寛平年間以降、天皇らの行幸先が大きく変化したことは確実である。第2表は、9世紀末～10世紀半ばにかけての天皇らによる平安京北郊・仁和寺・朱雀院への行幸の記録をまとめたものである。宇多天皇は、寛平7～昌泰元年(番号1～7)頃にはまだ、しばしば「北野」にあった雲林院・斎院・船岡などに出かけていた<sup>10)</sup>。

しかし寛平8年(896)閏1月25日に、朱雀院のおそらく拡張を伴う造作工事を御覧に

なった後、同年10月13日にはここで小鷹狩に興じ、上皇となった翌9年9月10日には家臣の道真らに漢詩を詠ませて秋水の情景を楽しんでいる(いずれも『日本紀略』)。さらに、その翌年の昌泰元年(898)2月17日には朱雀院に初めて移御せられ(『日本紀略』)、以後、醍醐天皇による朱雀院への新年の朝観行幸<sup>11)</sup>などが頻繁に行われるようになった。また朱雀院とともに、仁和寺への行幸も急激に増えていることが分かる。仁和2年(886)、光孝天皇の発願によって「西山御願寺」が建立されたことに始まる仁和寺は、同4年(888)、宇多天皇によって創立され、8月17日には先帝である光孝天皇の周忌御斎会がここで行われた(『日本紀略』)。さらに幼少の頃から仏教に信心の深かった宇多上皇は、昌泰2年(899)10月24日に同寺で出家し、法皇となった。延喜年間に入ると、醍醐天皇による仁和寺への朝観行幸も数多く見られるようになる。第2表によれば、淳和・仁明朝の雲林院から、宇多・醍醐朝の朱雀院・仁和寺へと、その行幸先は大きく変化したことが明らかである。それに対して10世紀の前半、第2表の番号24(延喜17年(917)閏10月19日)、26(延喜18年(918)10月19日)、32(延長4年(926)11月6日)、39(天暦元年(947)2月25日)、43(天暦元年閏7月27日)、48(天暦3年(949)2月24日)から、醍醐天皇などによる北野への行幸が6回認められるが、これらの行幸の中で雲林院に立ち寄ったという事実は確認されない。

10世紀の後半にあたる第1表の記録20以降には、宗教的な出来事に関わる記述が相次いで見られるようになるが、やがて菩提講に対する関心の高まりとともに仏地としての色

第2表 平安京北郊・朱雀院・仁和寺への行幸（9世紀末～10世紀の半ば）

番号	西暦	和暦	和暦月日	天皇・上皇等	場 所	出典
1	895	寛平7	3月5日	宇多天皇	北野（右近馬場等）	日本紀略
2	896	寛平8	閏1月6日	宇多天皇	北野（雲林院・船岡）	日本紀略
3	896	寛平8	閏1月25日	宇多天皇	朱雀院（工事御覧）	日本紀略
4	896	寛平8	閏1月	宇多天皇	斎院	中右記
5	896	寛平8	10月13日	宇多天皇	朱雀院	日本紀略
6	897	寛平9	5月17日	宇多天皇	朱雀院	日本紀略
7	898	昌泰1	秋／冬	宇多上皇	雲林院	菅家文章 <sup>6</sup>
8	899	昌泰2	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	朱雀院	日本紀略
9	900	昌泰3	1月3日	醍醐天皇・宇多上皇	朱雀院	扶桑略記
10	903	延喜3	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	西宮記
11	905	延喜5	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	日本紀略
12	906	延喜6	1月3日	醍醐天皇	仁和寺	西宮記
13	906	延喜6	10月26日	醍醐天皇	朱雀院	日本紀略
14	906	延喜6	11月7日	醍醐天皇・宇多法皇	朱雀院	日本紀略
15	907	延喜7	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	扶桑略記
16	910	延喜10	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	貞信公記
17	911	延喜11	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	貞信公記
18	912	延喜12	2月2日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	日本紀略
19	913	延喜13	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	貞信公記
20	914	延喜14	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	貞信公記
21	916	延喜16	3月7日	醍醐天皇・宇多法皇	朱雀院	日本紀略
22	916	延喜16	9月28日	醍醐天皇	朱雀院	日本紀略
23	917	延喜17	1月3日	醍醐天皇	仁和寺	勘例
24	917	延喜17	閏10月19日	醍醐天皇	北野（みこし岡）	日本紀略
25	918	延喜18	10月8日	醍醐天皇	朱雀院	貞信公記
26	918	延喜18	10月19日	醍醐天皇・皇太子	北野（知足院南・船岡）	西宮記
27	919	延喜19	10月20日	醍醐天皇	朱雀院	貞信公記
28	920	延喜20	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	貞信公記
29	921	延喜21	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	勘例
30	922	延喜21	12月9日	醍醐天皇	北野	日本紀略
31	925	延長3	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	日本紀略
32	926	延長4	11月6日	醍醐天皇	北野（右近馬場・船岡）	日本紀略
33	927	延長5	8月30日	醍醐天皇	朱雀院	貞信公記
34	928	延長6	10月21日	醍醐天皇	朱雀院	扶桑略記
35	929	延長7	1月3日	醍醐天皇・宇多法皇	仁和寺	御遊抄
36	946	天慶9	8月17日	村上天皇・朱雀上皇	朱雀院	日本紀略
37	947	天曆1	1月4日	村上天皇・朱雀上皇	朱雀院	日本紀略
38	947	天曆1	1月9日	村上天皇	朱雀院	御遊抄
39	947	天曆1	2月25日	朱雀上皇	北野	九曆
40	947	天曆1	3月9日	村上天皇・朱雀上皇	朱雀院	日本紀略
41	947	天曆1	3月15日	村上天皇・太政太后	朱雀院	日本紀略
42	947	天曆1	4月15日	村上天皇・太政太后	朱雀院	日本紀略
43	947	天曆1	閏7月27日	朱雀上皇	北野	日本紀略
44	948	天曆1	11月28日	村上天皇	朱雀院	日本紀略
45	948	天曆2	1月3日	村上天皇・朱雀上皇	朱雀院	日本紀略
46	948	天曆2	3月9日	村上天皇・皇后・朱雀上皇	朱雀院	日本紀略
47	948	天曆2	8月17日	村上天皇	朱雀院	日本紀略
48	949	天曆3	2月24日	朱雀上皇	北野	日本紀略
49	949	天曆3	4月12日	朱雀上皇	朱雀院	日本紀略
50	950	天曆4	1月25日	村上天皇・皇太后	朱雀院	御遊抄
51	951	天曆5	1月4日	村上天皇・朱雀上皇	朱雀院	勘例

彩がより強いものとなっていき、第2ともいえる雲林院の最盛期を迎えることとなる。10世紀末～11世紀にかけての雲林院のようすやその変化、菩提講のにぎわい・性格等については、先述の柴田のほか、すでに森本<sup>12)</sup>、小山<sup>13)</sup>、加納<sup>14)</sup>、小原<sup>15)</sup>、袴田<sup>16)</sup>ら先学の詳細な論考があるのでここでは繰り返さない。ほかに、作品中に登場する雲林院の風光や参籠、菩提講について分析した成果も少なくない<sup>17)</sup>。

## 2. 多宝塔の創建

第1表を見ると、雲林院が一段と宗教的な色彩を色濃くし、かつ大きく発展していく最大のきっかけは、多宝塔の創建にあったと考えられる。記録21（天暦7年（953）2月18日）、24（天徳4年（960）2月24日）、25（応和3年（963）3月19日）は、いずれも多宝塔の建設に関わるものである。このうち21では「御願小多宝塔」が、また24・25によると、応和3年にはおそらくより大規模な多宝塔がそれぞれ創建されている。そうだとすればこれらの塔は、10年間にわたる悲願の末に造営されたものといえる。

記録24・25に関わる多宝塔の建築材料の調達は、遠く伊賀国の山林と結びついていた。すなわち、記録22（天徳2年（959）12月10日付「橘元実玉瀧杣施入状案」）と、23（翌3年（960）12月26日付の「太政官牒」および「太政官符案」）には、東大寺や冷泉院等の修理や一部増築に必要な材木が、伊賀国の玉瀧杣から切り出されたことが示されている。22の施入状案によれば、この土地は以前には橘元実ら先祖の墳墓であったが、延喜17年（917）12月1日に東大寺の講堂と僧房が焼失した時（『日本紀略』、延喜20年12月28日『東大寺

要録』10）、同杣山の木が切り出された。元実はこのことを不服として訴え、認められたものの、東大寺の修理を妨げたためか災禍に見舞われて、長い間他国を浮浪することになった。天徳2年によりやく戻ったところ、再び木が切り出されていたというのである。先祖のたたりを恐れた元実は、結局東大寺に墳墓を除いた土地を施入することになるのであるが、雲林院の材木採取も含めたその経緯が「太政官牒」「太政官符案」に詳しく記載されている。東大寺への「太政官牒」（東大寺東南院文書2-476）には、

「尋事案内、東大寺并修理職・冷泉院・雲林院等材木、各給官符、造運件杣、官符云、件杣私人所領也、宮城修理之間、給官符令造用云云、無力愁申私歎之間、樹木漸切掃、墳墓作露地、不若永奉施入御寺、……今臨宝塔造立之時、弥知仏神催入之由、今修理職・冷泉院・雲林院等料数千材木、造運件杣之間、樹木漸盡残木非幾、而伝承、又法性寺諸堂材木可被入造件杣云云、謹検事情、法性寺者は新御願、其寄尤重、所用材木亦長大、仰造諸国非可背申、東大寺者は古御願、世人随輕、所造材木亦極長大、諸国申返、既不承引…」

とあって、天徳3年12月26日以降、同杣山からの東大寺以外の材木調達は停止されることになった。しかし文面を検討すれば、「樹木がすっかり切り払われて、森の中にあるはずの元実一族の墳墓が露出した」状態となっていることから、すでにこの時までには東大寺、修理職、冷泉院、雲林院に必要なかなりの木が切り出されていたものと推察できる。また「太政官符案」の文面より、この時東大寺の西宝塔<sup>18)</sup>の心柱を切り出したことが明らかで

あるから、同じ時に雲林院多宝塔用の心柱もまた切り出されていた可能性が高い。この推定を裏付けるかのよう、翌天徳4年2月24日、雲林院に御願の心柱が立てられている(第1表、記録24)。それは、玉瀧柚の問題が一応の決着をみたわずか2か月後のことである。これから間もなく、雲林院では法会や読経がたびたび行われるようになり、菩提講も始められるに至って最盛期を迎えることになるのである。

また「案内」の文面によると、この時新たに「法性寺諸堂」の木も切り出されようとしていたことが分かる。法性寺は延長3年(925)、『貞信公記』の記主として知られる藤原忠平によって創建されたものである(『貞信公記抄』同年3月8日、『日本紀略』同年5月18日)。天徳頃における同寺の状況を調べると、天徳2年3月30日に「今日法性寺有火」(『日本紀略』)とあって、火災に見舞われている。しかし、「古御願」の東大寺とは違って法性寺は「新御願」であったので、玉瀧柚からの材木調達は計画通りには運ばなかったのだろう。ただし、約2か月後にあたる同2年の6月4日には、1年前に薨去された康子内親王の周忌法事が法性寺において行われていることから(『日本紀略』)、3月の火災は寺院の大半を焼くような壊滅的なものではなかったものと考えられる。

なお、応和3年3月19日の多宝塔供養時の「願文」<sup>19)</sup>によれば、「此院堂舎鐘樓、皆悉具足。其所無者、塔婆而已。風聞、造塔善根、流伝貝葉。豈唯果報之殊勝乎、兼復道場之莊嚴也。仍心中発願之後、新結構多宝塔一基、安置五仏像」とあって、多宝塔の建立を計画した時には、境内の堂舎や鐘樓も含めて十分

に寺院としての体裁が備えられていたことが明らかとなる。そうだとすれば、当然、いくつかの堂舎または鐘樓等の創建は、10世紀の前半期にまで遡ることになるだろう。

### 3. 雲林院の衰退—13世紀頃の様子—

10世紀末～11世紀にかけて賑わいをみせた菩提講であったが、12世紀に入ると雲林院に関する記録は急に少なくなる。また11世紀末～12世紀にかけては、宗教色の中でも葬送や殯(荒城)の儀礼に関する記録が目立つようになる。そして13世紀頃になると、雲林院そのものについての記録がほとんど見られなくなってしまう。第3表は、雲林院とその周辺部に関する西暦1200年以降の記録をまとめたものである。表に示された全21の記録の中で、確実に雲林院そのものについて書かれているとみなせるものは、記録5、9、10のわずか3例にすぎない。残りはすべて、雲林院付近にあった建物や土地について触れたものである。13世紀頃には、すでに雲林院はこの付近の中心的な施設ではなくなっていた。すでに見た『山域名勝志』が引く『徳治三年沙門願蓮勸進ノ詞』には、「建治のころ比丘尼正信あまねく上下をすゝめて聊修造をいたす不断念仏の梵行をみす」とあって、菩提講は建治年間(1275～78)頃に衰退したことになるが、13世紀の後半まで続けられていたという他の記録は確認されない。

13世紀前半頃の雲林院の実態は、『民経記』の記録9によって具体的に把握できる。すなわち貞永元年(1232)5月29日、記主の藤原経光は賀茂社と北野社に出かけた。賀茂下社から上社に参拝の後、北野社に向かう途中で雲林院のそばを通ったところ、「紫野雲林院辺荒巷草深、本院之遺跡無人跡、無何所断腸也」

第3表 13世紀頃における雲林院

記録	西暦	和暦	和暦月日	出典	巻・番号	記	事	内	容	場所
1	1200	正治2	9月20日	猪熊閔白記		殿下為令違方給、渡御治部卿顯信卿雲林院家		本通、顯信（源顯信）の雲林院の家に方違	付近	
2	1201	建仁1	6月29日	猪熊閔白記		今夜殿下為令違方給、渡御治部卿顯信卿雲林院家、秋節也		本通、顯信（源顯信）の雲林院の家に方違	付近	
3	1202	建仁2	10月13日	猪熊閔白記		殿下為令違冬節方給、渡御治部卿入道雲林院家		本通、冬節により顯信雲林院の家に方違	付近	
4	1202	建仁2	11月7日	猪熊閔白記		殿下入夜渡治部卿入道雲林院家、依御方違也		本通、顯信（源顯信）の雲林院の家に方違	付近	
5	1218	建保6	5月20日	古今著聞集	2	使庁の結縁経は…別当顯俊卿、雲林院にておこなひたりけり		雲林院で検非違使庁の結縁経	雲林院	
6	1228	安貞2	10月11日	民経記		其後參殿下、此間雲林院殿可有御出云々		藤原家実、雲林院殿に行く	付近	
7	1230	寛喜2	10月6日	真珠庵文書	6-851	大進法眼某敷地売券案うんりんのきたのなかのほうの地		雲林院の北、中坊の敷地売券	付近	
8	1232	寛喜4	3月1日	真珠庵文書	6-851	在雲林院北中坊敷地		雲林院の北、中坊の敷地売券	付近	
9	1232	貞永1	5月29日	民経記		紫野雲林院辺荒巷草深、本院之遺跡無人跡		雲林院の付近は草深く、本院に人影無し	雲林院・付近	
10	1233	天福1	5月12日	民経記		雲林院 経海		季御説経の僧名に「雲林院、経海」の名	雲林院	
11	1237	嘉祿3	6月8日	真珠庵文書	6-851	在雲林院北中坊敷地		雲林院の北、中坊の敷地売券	付近	
12	1243	仁治3	12月28日	平戸記		可被移御喪於雲林院西林寺云々		雲林院付近の西林寺にて御喪礼	付近	
13	1246	寛元4	4月1日	岡屋閔白記		相具女房（藤原仁子）、向雲林院草堂		雲林院の草堂に行く	付近	
14	1246	寛元4	4月6日	岡屋閔白記		相具女房、向堀川井雲林院、則帰家		堀川第と雲林院の草堂に行く	付近	
15	1246	寛元4	閏4月3日	岡屋閔白記		向雲林院、見廻了歸家		雲林院の草堂に行く	付近	
16	1246	寛元4	5月15日	岡屋閔白記		相具女房、向雲林院		雲林院の草堂に行く	付近	
17	1257	康元1	12月14日	真珠庵文書	7-936	うちのちいへぬしの事		雲林院の土地、一戸主のこと	付近	
18	1277	建治3	5月4日	真珠庵文書	6-851	屋敷地一处在雲林院領、四至等在本券		雲林院近辺の土地売券	付近	
19	1283	弘安6	8月	大徳寺文書	1-456	合一所雲林院屋敷		雲林院近辺の土地売券	付近	
20	1290	正応3	4月9日	大徳寺文書	1-456	合在雲林院、口拾菴丈與廿丈右件畠者		雲林院近辺の土地売券	付近	
21	1296	永仁4	4月10日	大徳寺文書	1-456	合在雲林院、口拾菴丈與廿丈右件畠者		雲林院近辺の土地売券	付近	



という状態であったと書き残している。その頃には、雲林院のあたりは荒れて草が深く生い茂り、かつて本院があったはずの場所には人影すらなかったというのである。終日雨が降っていたこの年の5月29日は、グレゴリオ暦に換算すれば6月26日となるから、おそらく梅雨の雨の中で夏草が生えるままとになっていたものと考えられる。そうした草深き中に、わずかに名残をとどめる本院の変わり果てた姿を見て、経光は悲しみに堪えられなかったのであろう。

14～15世紀に入ると、雲林院付近の土地は大徳寺の勢力下に入っていくことになるが、ただちに雲林院自体の敷地の所有権が奪われていくようなことはなかったようである。例えば、大徳寺関連の土地所有の変遷を示したその頃の宅地や耕地の売券・手継券文には、「雲林院辺」「雲林院之後(うしろ)」「雲林院北」「雲林院之叢きわ」などの記述が多数認められる。土地の具体的な場所を示したこれらの呼称から、雲林院自体の敷地が他と明確に区別されていたことが推察される。しかし『宝徳三年大宮郷地からみ帳』(1451)の巻末部<sup>20)</sup>には、「次ノ墓ノ西南、赤社ノ廻マテ」「以上梶井殿御門跡東、雲林院ノ赤社北まで」とあることから、15世紀の半ばには雲林院敷地の一部が「赤社」すなわち玄武神社の境内に変化していたことが分かる。またこの頃には、作人の居住地として「うちい」「うちいん」などの地名が見られることより、雲林院村の存在も確認される。ただし、この場所が雲林院の敷地を含んでいたか否かについては不明である。しかし、永正元年(1504)4月の「松源院被管力者道元作職買得当知行地目録」(大徳寺文書2-859)には、知行地「壹

段半 在所大宮郷内字名號池田田」とある。「池田」の場所は、須磨によれば「赤社」の北に接するところであるから<sup>21)</sup>、これもまた雲林院敷地内の変化であることを示している。このように、少なくとも15世紀の半ば頃には、雲林院敷地内の土地所有も変化し始めていたことが確認される。

なお、元亨4年(1324)5月、大徳寺の開山である宗峰妙超(大燈国師)によって書かれた置文に「雲林院邊菩提講東塔中北寄貳拾丈、為寺院敷地」(大徳寺文書13-3208)とあることから、この敷地の場所を雲林院寺域内の一部とする考え方もなされている<sup>22)</sup>。しかし、文書にははっきりと「雲林院邊」、すなわち「雲林院の付近」となっているため、これはむしろ、本来の意味に解釈をしておいた方がいいだろう。

### III. 雲林院の場所と規模の解釈

#### 1. 『古今榮雅抄』に記載されたサイズとその根拠

すでに第1表の記録19でも示したように、『古今和歌集』の中にも雲林院に関する歌がいくつか詠まれている。『古今和歌集』は最初の勅撰和歌集としてよく知られているが、古来、この和歌集に関する多くの注釈書が作成されてきた。その中の1つが『古今榮雅抄』で、その原聞書の内容は、和歌や蹴鞠の家として知られた飛鳥井家によって作成されたもので、雅世の子の雅親(法名は榮雅)が足利義政に『古今和歌集』の講釈を行った際のものと伝えられている<sup>23)</sup>。

『古今和歌集』巻第5の「秋歌」中には、僧正遍照によって詠まれた雲林院の歌一首が含

まれている。すなわち、

うりむゐんの木のかげにたたずみてよめる

292 わび人のわきてたちよるこの本はた  
のむかげなくもみぢりけり

であるが<sup>24)</sup>、この詞書きに出てくる「うり  
むゐん」に関する『古今榮雅抄』の註釈中に、  
雲林院の具体的な大きさが明記されている。  
すなわちその個所を引用すると、

「雲林院ハ淳和天皇の離宮なり。仁明天皇に  
処分し奉らる。御養子也。次常康親王に処分  
し給ふ。本堂といふは彼親王の堂也。そのゝ  
ち御願寺に申なす。天曆の御時、実性僧都を  
別当になし給。御願寺塔など立られけり。  
依レ勅殖二呉竹一。又有二靈驗千手観音像一東西  
七十三丈南北七十三丈也。雲林院は紫野に  
有。船岡山の東。からすきかはなの近所うち  
いと云所也」<sup>25)</sup>

とあって、雲林院は73丈四方の規模を持っ  
ていたとされている。

しかし73というこの数値は、唯一の例外で  
ある宮城南大路（二条大路のことで17丈幅）  
を除いて、4の倍数と丸い数である10との組  
み合わせによって成り立っている平安京の条  
坊の構造と比較した場合<sup>26)</sup>、どう考えても落  
ち着きがよくない。言い換えれば、73は4の  
倍数とはならない上に、10またはその倍数と  
組み合わせることもできないのである。或い  
は本来の72丈や74丈といった数値を誤って  
記載したか、この頃にはわずかに変化してい  
たかなどの原因を考えることも可能である  
が、一方で『古今榮雅抄』が原聞書の内容を  
反映したものとする限り、規模を示す「東  
西七十三丈南北七十三丈也」という数値が15  
世紀後半を大きく下る時代の情報に基づいて  
記載されたものとは考えにくい。仮にここに

示された雲林院の規模が、『古今榮雅抄』成立  
当時の15世紀後半頃の実態を反映したもので  
あったとしても、その頃までの雲林院敷地の  
変化は、すでに述べたように、「赤社」など一  
部の地域に限られていたという可能性などか  
ら考えて、本来のサイズと大きく隔たってい  
る数値ではなかろう。

では、73丈という規模はどのように解釈す  
べきであろうか。雲林院の立地する平安京北  
郊というその場所を考えた場合、この敷地は  
平安京のような都市計画の条坊ではなく、農  
村計画である条里制の尺度に基づいて建設さ  
れたものではなかっただろうか。その可能性  
を、分かりやすいメートル法の尺度をいっ  
たん経由しながら検証してみよう。

すなわち73丈という長さは、平安京の造宮  
尺が1尺=29.846668cmであるから<sup>27)</sup>、  
 $2.9846668\text{ m} \times 73 = 217.8806764\text{ m}$  となっ  
て、これを条里の1坪分の長さである109mで割  
ると、1.998905288という極めて2に近い  
数値を得ることができる。したがって、73丈  
という長さは条里の坪2つ分の長さ、つまり  
「東西七十三丈南北七十三丈也」とされる敷  
地は、条里の坪を4つ分利用することによっ  
て建設されたものであることが判明する。同  
様に、条里の尺度から逆算をすると、坪2つ  
分の長さは  $109\text{ m} \times 2 = 218\text{ m}$  となるから、  
 $218 \div 2.9846668 = 73.03997886$  丈となっ  
て、坪2つ分の長さが73丈に極めて近い値とな  
ることが確認される。したがって、条里と条坊  
の違いこそあるものの、同じ淳和天皇によっ  
て造られた淳和院が4町規模（平安京の町4  
つ分）の離宮であったこと<sup>28)</sup>、雲林院やその  
近くの船岡山・斎院などにしばしば行幸した  
ことが確認される宇多天皇によって創建され

た仁和寺もまた、葛野郡条里の畦畔に沿って造られた可能性が高いこと<sup>29)</sup>などから考えて、正方形としてとらえられた雲林院も、その当初から条里4坪分の敷地規模を有していたことが十分に考えられる。

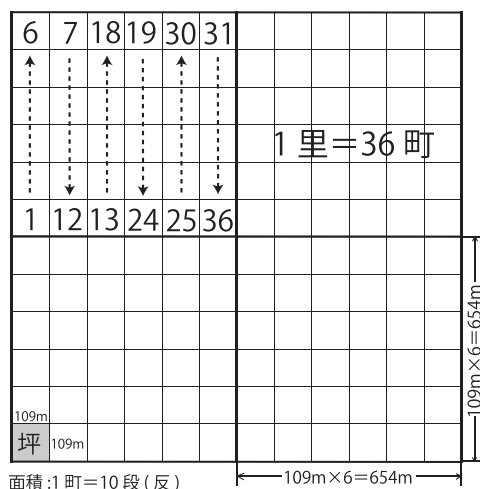
この考え方をさらに補強するために、平安京の成立以前から京都盆地の北東部に広がっていた愛宕郡の条里と雲林院との関係を分析してみたい。

## 2. 愛宕郡条里と雲林院との関係

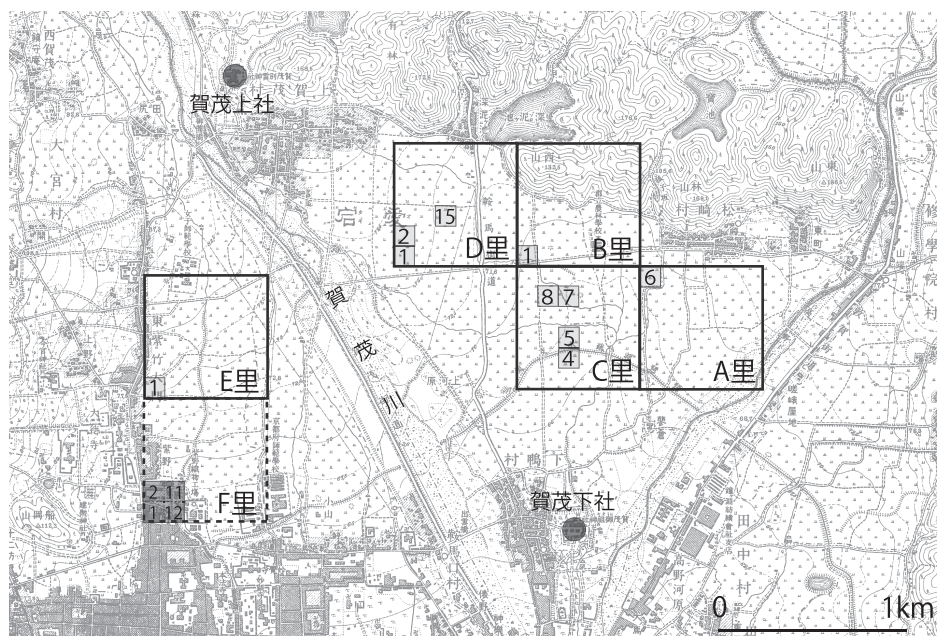
愛宕郡の条里については、米倉による先駆的な研究がある<sup>30)</sup>。米倉は、長保4年(1002)2月19日の「山城国珍皇寺領坪付案」(平安遺文2-421)に記載された同寺の敷地が、4条高橋里の35・36坪とこの里の東側1・2坪に所在していたことを指摘した上で、里内の坪の配列が西南隅の1坪から北に数え進み、東南隅の36坪で終わる坪並であったことを明らかにした。また、その坪並は、松ヶ崎や植物園、百万遍などに検出される数詞地名とも符合することを突き止めた。したがって愛宕郡条里の条は、南から始まって北側に配列さ

れていたものと考えられる。ある里における坪の配列を図示すれば、第1図のようになる。さらにその成果を踏まえて金田は、明治期以降にまで残存した道路・畦畔に沿って同条里のプランを推定している<sup>31)</sup>。そのほか、愛宕郡や愛宕郡条里については藤岡<sup>32)</sup>や角田<sup>33)</sup>、岸<sup>34)</sup>などの研究が見られるが、分析・考察範囲が賀茂川の右岸域にまで及んでいるものはなかった。しかし、須磨<sup>35)</sup>によって賀茂川の右岸域をも含む賀茂社領の中世起源の詳細な小字名と耕地、それらの具体的な場所とが比定されたことによって、郡域全体の条里を検討する手がかりが与えられた。

第2図は、須磨によって明らかにされた条里関係の数詞地名の場所と、先学らの復原結果を考慮に入れて、愛宕郡の賀茂川兩岸域に残存する数詞地名の坪並が見られる場所とそれを含む里とを記入したものである。近代の道路や畦畔を基準として復原すれば、金田によって作成された図のように、里の方向は正南北からやや西側に傾けて作図する方法も考えられるが、賀茂川左岸の北西部や右岸域では必ずしもそうはならないので、ここでは便宜的に正南北方向の里の復原を行っている。賀茂川の兩岸域で数詞地名に関連する坪が認められるのは、計5か里におよぶ。しかし、具体的な里名が分からないため、図ではアルファベットのA～E里で示した。具体的な残存数詞地名を順に見ていくと、A里の6は「六ノ坪」で、現在も「松ヶ崎六ノ坪町」の地名が残る場所にあたる。以下、B里の「一ノ坪」、C里の「八ノ坪」「四ノ坪(実際の坪並は14坪)」「五坪(同じく15坪)」、D里の「一ノ坪」「二ノ坪」と、右岸域のE里には「一ノ坪」の各数詞地名が検出されている。これらの数詞



第1図 愛宕郡条里の坪並



第2図 愛宕郡条里域における残存数詞地名の分布

ベースマップには、大日本帝国陸地測量部発行の「正式2万分の1地形図 京都北部」(1909年測図・1912年製版)を使用した。第3図も同じ。

と坪の配列から、賀茂川兩岸地域においても、先に米倉によって復原された珍皇寺付近における愛宕郡条里の坪並と符合することが明らかである。さらにこの坪並を考慮しながら改めて残存地名を検討すると、例えばC里の「八ノ坪」の東には「ナナ板(実際の坪並は17坪)」が、またD里「二ノ坪」の東北東には「チウノ坪(15坪)」が分布しており、それぞれ坪並の数字と一致する可能性を示唆している。

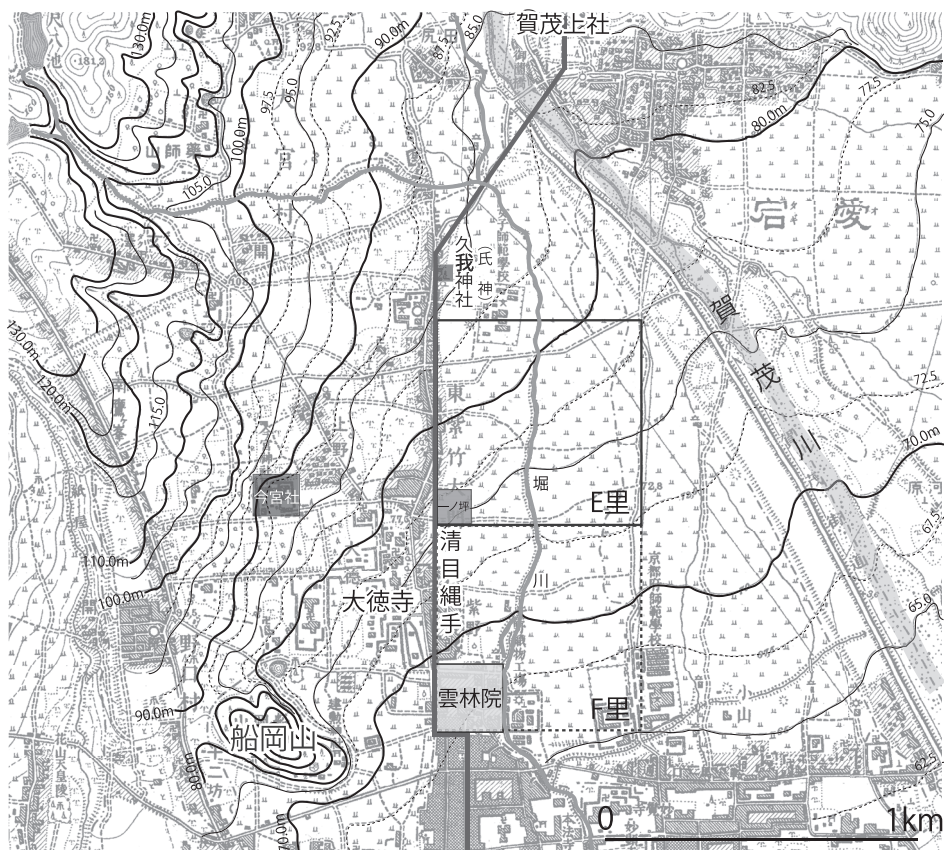
賀茂川左岸のA～D里と右岸のE里とは、残存する道路・畦畔の方向がわずかに異なるため、現在、幾何学的にぴったりとは合致しない。そのためE里の位置については、南北朝末期に作成されたとみなされる『往来田古帳』などから、須磨によって復原された「一ノ坪」の場所<sup>36)</sup>を基準にその位置を定めた。

そしてE里を基準にF里の区画を復原すると、F里南西隅にあたる1・2・11・12坪の計4か坪の範囲に、その南側と西側とに道路が、また東側に段丘を伴う堀川の旧流路がそれぞれ位置する雲林院の具体的な場所が特定される。

### 3. 雲林院と付近の道路

復原された雲林院の南側と西側とには、現在も直角に交わる道路が走っている。それらは、近世初期に作成された『洛中絵図』などによっても確認されることから<sup>37)</sup>、その起源はかなり古いことが明らかである。また、復原された雲林院南辺の中央部より道路が南下しており、そのまま平安京大宮大路に直線でつながることから、これが大宮末路であったことは疑いない。では、雲林院の西側を北に延びる道路は、どことどのようにつながっていたのだろうか。





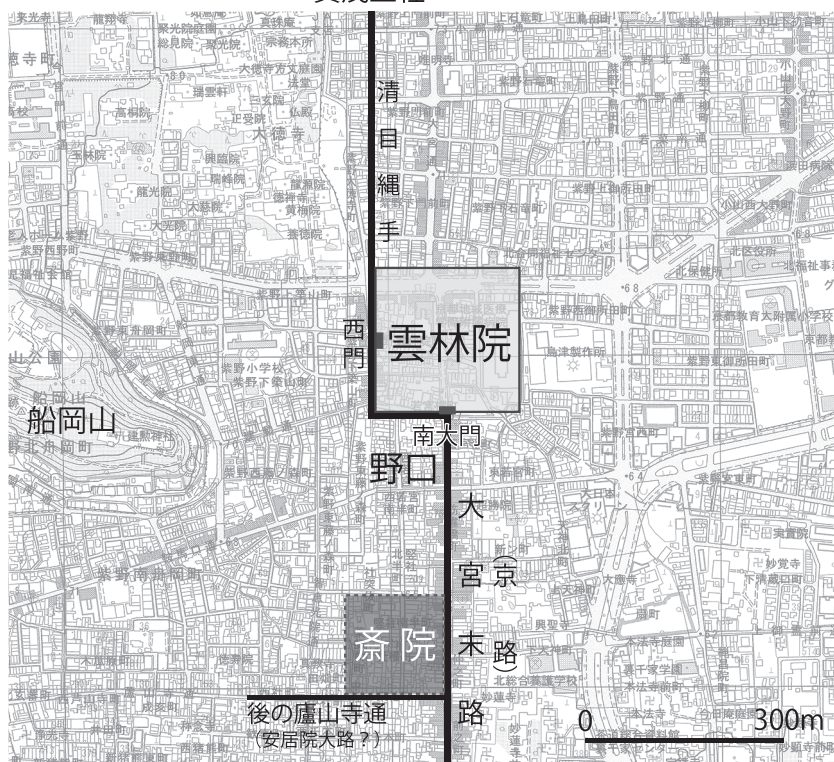
第3図 雲林院と愛宕郡条里の清目縄手

鎌倉中期にあたる弘長3年(1264)12月8日の「沙彌淨行田畠譲状案」(『大徳寺文書』5-1942)によれば、田畠記載の中に「田半 清目縄手上同領雑役田」、すなわち「清目縄手」という、道路を示唆する地名を見いだすことができる。「清目縄手」の地名は、先の『往来田古帳』や、文明4年(1473)12月6日の「常磐井宮御領賀茂雑役田売券」(『大徳寺文書』2-819)の中にも認められ、地名の起源が少なくとも鎌倉中期にまで遡る上に、13世紀半ば～15世紀後半までのかなり長い期間にわたって呼称されていたことは間違いない。「清目縄手」の具体的な場所について須磨は、「一ノ

坪」のあたりにあって、現在の「大徳寺道から東へ80メートルほど隔たったところを南北に通じていた縄手」<sup>38)</sup>であると現地比定をしている。

改めて、雲林院を含めた「清目縄手」付近の状況を復原すれば、第3図のようになる。条里のE里・F里西側の境界線、すなわち雲林院の西側から北側に向かって垂直に線を引くと、それは大徳寺の東側を南北に延びる現在の大徳寺通にほぼ平行して、式内社である久我神社<sup>39)</sup>の西側に接し、この一部がかつての「清目縄手」であったことが判明する。この道はさらに、久我神社のすぐ北側で西賀茂方面

賀茂上社へ



平安京へ

#### 第4図 雲林院と清目縄手・大宮末路との関係

ベースマップには、国土地理院発行の「1 万分の 1 地形図 太秦・京都御所」(1991 年修正・1992 年発行)を使用した。

に続く道と分岐し、近代の地形図に残る道路に沿って北北東へと延長すれば、賀茂川の河原を経て賀茂上社一の鳥居の前に至る。なお、『長秋記』保延元年4月19日条には賀茂祭還立の記事が掲載されており、そこには「橋流斎王不可還給之由申上皇」「凡渡橋事不可叶、只以人夫可奉渡者」などとあって賀茂川を渡る「橋」の存在が示唆されているが、これは歴史時代における同川の洪水頻度の高さを考えた場合<sup>40)</sup>、とうてい常設の橋が架かっていたとは考えられない。この場合は、むしろ祭のための一時的な板橋であったと解釈するのが適当であろう。この年の賀茂祭の頃の天候

は雨が多く、4月10日頃から22日頃まで雨の日が毎日のように続いていた。保延元年(1135)の4月10日は、グレゴリオ暦で5月31日となるから、すでに梅雨となっていたのだろう。還立の日は河水が堤から溢れ、上社周辺は洪水状態となっていたようである。

さらに第4図は、雲林院と、その西側を通る「清目縄手」及び雲林院から南に延びて平安京大宮大路と結ぶ大宮末路との関係を示したものである。雲林院の南側に南大門があったことは、永観3年(985)2月13日における円融院の船岡への「子の日遊び」を描いた『今昔物語』から知ることができる。その冒頭

部を示せば、

「今昔、円融院ノ天皇、位去セ給テ後、御子ノ日ノ逍遙ノ為ニ、船岳ト云フ所ニ出サセ給ケルニ、堀川ノ院ヨリ出サセ給テ、二条ヨリ西へ大宮マデ、大宮ヨリ上ニ御マシケルニ、物見車所無ク立重タリ。上達部・殿上人ノ仕レル装束、書ムニモ可書尽クモ非ズ。

院ハ雲林院ノ南ノ大門ノ前ニシテ御馬ニ奉テ、紫野ニ御マシ着タレバ、船岳ノ北面ニ、小松所々ニ群生タル中ニ、遣水ヲ遣リ、石ヲ立、砂ヲ敷テ、唐錦ノ平張ヲ立テ、簾ヲ懸、板敷ヲ敷キ、高欄（欄）ヲゾシテ、其ノ微妙キ事無限シ。……」<sup>41)</sup>

とあって、大宮大路をそのまま北上した道が大宮末路であったこと、その延長に雲林院の南大門が存在していたことが明らかである。また『小右記』の同日条には、「太上皇於野口乗御馬、右衛門尉惟風、左馬允親平等為御馬籠、殿上侍臣皆悉布衣、京路野辺見物車如雲」<sup>42)</sup>と書かれており、雲林院南大門付近の地名が「野口（ののくち）」であったこと<sup>43)</sup>、また大宮末路が「京路」と呼ばれていたことなどが分かる。

やや時代を下った史料になるが、雲林院には南大門のほか西門もあった。永久2年(1114)10月1日、堀川院の中宮であった篤子が崩御され(『殿暦』『中右記』同日条)、雲林院の掌侍堂に移されて、翌日葬られた。その時の状況が、三善為康(1049-1139)によって著された『後拾遺往生伝』に詳しく書かれている<sup>44)</sup>。そこには、

「只祈臨終之速証。兼占雲林之洞。令作柏城之墳。同十月一日。侍其造畢。忽兮崩御。〈御年五十五〉即日戌時。奉遷雲林院。其翌日戌剋。奉安御墓。彼入滅夜。幼年宮女夢。調微細音

楽。出自西門。指西行啓云々。……又同廿三日。撰津国安寧寺住僧夢。到雲林院。見船岡方。当御墓所。修于迎講。即時阿弥陀仏乗於塔婆。与無量聖衆。迎后儀而去云々」

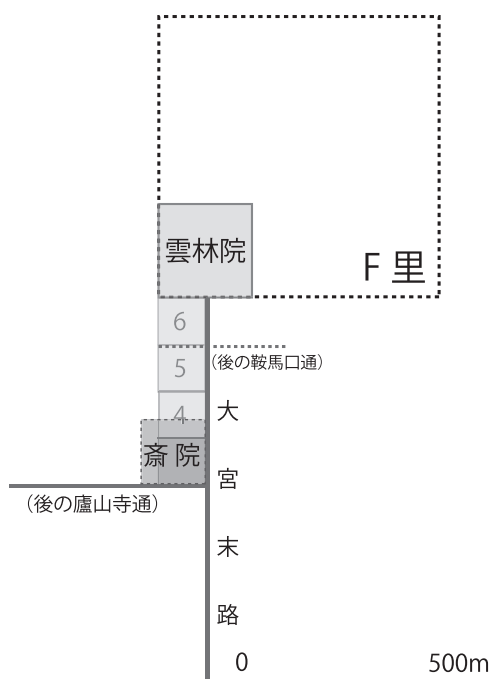
とあって、中宮篤子の崩御時のようすと、葬儀直後に側人や撰津国の僧侶らが見た夢の内容とが記されている。そこには入滅の夜、仕えていた幼年宮女の見た夢に、篤子がかすかな音楽の調べとともに西門を出て行かれる情景が表現されており、その方向は撰津国安寧寺の僧の見た夢によると、船岡山であったことが分かる。すなわち、雲林院の西門ないし西側の延長上には船岡山があった。雲林院と船岡山との位置関係については、同じ『後拾遺往生伝』巻中の22「左馬大夫入道貞季」の項目にも記載されている。

「幼年宮女」の夢に描かれた「西門」とは、久寿2年(1155)7月23日に崩御された近衛天皇の船岡山葬送時に出てくる、「殿下於知足院、猶着御藁杵、召御車、於雲林院四足門前小河、脱藁杵、洗御足、御手祓、召草人形云々」という『兵範記』の記述(同年8月2日条)<sup>45)</sup>の「四足門」と、そしてまた「小河」も、斎院のそばを流れていた有栖川とおそらくつながるものであろう。したがって、その具体的な場所を今の常德寺の付近とする杉山によって提案された知足院の位置<sup>1)</sup>についても、当然改められるべきである。それらの分析については、稿を改めて詳しく述べることにしたい。

また第4図には、角田の復原案<sup>46)</sup>に沿って紫野斎院の場所を記入しておいた。しかし、近世に出版された地誌類を含むさまざまな文献史料・文学作品を駆使して創案されたその場所については、十分に説得力があるものの、その規模を50丈とする復原案には、当時の具

体的な史料を伴う決定的な根拠に乏しく、なお再考の余地があるものと思われる。果たして、齋院の規模は平安京の条坊の尺度に基づいてなされものであろうか。初代賀茂齋院の有智子内親王が卜定されたのは弘仁元年(810)のこととされており(『本朝月令』、「4 月中西賀茂祭事」や『一代要記』、「嵯峨」など)、同弘仁9年(818)には初めて齋院司が設置されていることから<sup>47)</sup>、すでに弘仁年間には紫野齋院は機能し始め、そこにあるべき建物もある程度は整っていた可能性もあろう。また、『続日本後紀』承和2年(835)4月20日には「高子内親王禊于賀茂川、始入齋院」とあって、この時点で齋院が機能していたことは事実である。齋院が、この間のいつ頃に設置されたかについては明らかではないが、いずれにしても73丈という『古今榮雅抄』に書かれた雲林院の規模が、条坊のそれではなく条里の尺度に基づいて計画されたことが明らかにされた今、雲林院の前身である紫野院と前後して創設された紫野齋院の規模もまた、本来は農村計画の尺度であった条里と関連している可能性が高いと考えられる。

第5図は、雲林院の南側にも当然広がっていたと考えられる条里を想定し、F里からさらに南側へと続く坪を、角田のいう齋院想定域付近にまで延長したものである。この作業の結果、1つめの坪(想定6坪)の南辺付近には後の鞍馬口通の一部が一致し、また4つめの坪(想定3坪)の南側はちょうど後の廬山寺通(安居院大路か?)と一致することが分かる。少なくとも、図に示した部分の鞍馬口通と廬山寺通は、『洛中絵図』にも描かれている道で、その起源が近世初期以前に遡ることは間違いない。そればかりか、『小右記』長和4



第5図 雲林院南側の条里と齋院(角田想定)との関係

年(1015)4月9日・10日条に出てくる「南大路東鳥居」や「南大道東鳥居」が現在の廬山寺通にあたると考えれば、その起源は11世紀初期以前に遡ることになる。一方、大宮末路も平安京条坊の延長道路とはいえ、同時に雲林院南中央の南大門に突き当たることから、条里の区画に整合する道路でもある。齋院の敷地がこれら廬山寺通と大宮末路とに囲まれて立地していたとすれば、その具体的な大きさこそ不明であるが、これもまた条里の尺度に基づいていたと考えるのがより自然ではないだろうか。

#### IV. 賀茂祭還立の道筋

『枕草子』の「鳥は」や「見物は」の書き出して始まる章段には、雲林院や知足院の付近



で賀茂祭に奉仕した斎王の還立（還さ）を見る光景が描かれている。斎王の還立に関連した同様の記述は、例えば天曆3年（949）4月25日（『日本紀略』）、長徳3年（997）4月17日（『小右記』）、治安3年（1023）4月18日（『同』）、万寿4年（1027）4月16日（『同』）、永長元年（1096）4月15日（『中右記』）、元永元年（1119）4月23日（『長秋記』）、大治4年（1129）4月26日（『同』）、仁平4年（1154）4月28日（『兵範記』）、嘉応2年（1170）4月18日（『同』）などにも認められ、この付近が還立の見物にもっとも好都合なスポットの1つであったことを伝えている。

すでにみた弘仁元年の有智子内親王から、建暦2年（1212）の礼子内親王に至るまで、約400年間にわたって続いた斎王は、未婚の内親王か女王の中からトイによって定められるのが常であった。斎王は、まず宮中の初斎院で2年間の潔斎生活を送り、3年目の4月に初めて紫野の斎院に入る。また、そこでは「忌詞」（不吉な意味や連想をもつ語の代わりに用いる言葉）を用いるなど、常に不浄を避けることに努めていた<sup>48)</sup>。このように、斎王は神聖な存在で、斎王の常駐する斎院もまた、神聖な場所として崇められていた。毎年4月中西の日に、下社と上社における賀茂祭の社頭の儀を終えた後、上社の神館にて宿泊することが多かった斎王は、翌日になって斎院に還御した。上で見た還立の記録は、そのすべてが祭翌日のものとなっている。

賀茂上社から式内社の久我神社西側を通り、雲林院の西側、南側中央から斎院に至る道筋は、まさに賀茂祭の後に斎王が通過する神聖な道であった。少なくとも13世紀半ば～15世紀後半にわたって呼称された「清目縄手」

は、「きよめなわて」と読まれ、その語源は斎王還御の道筋、すなわち「清い道」「神聖な道」の意であったと推察される。

『小右記』寛仁3年（1019）7月9日条には、その前年にあたる同2年11月25日に下された太政官符が引かれており<sup>49)</sup>、それとともに愛宕郡内の計8郷を以て上下賀茂社に寄進された経緯が詳細に記されている。興味深いのは、同官符中の8郷の四至を示したところに、「東限延暦寺四至、南限皇城北大路同末、西限大宮東大路同末、北限郡界」と明記されており、この時寄進された下社（御祖社）4郷の「蓼倉郷、栗野郷、上栗田郷、出雲郷」、上社（別雷社）4郷の「賀茂郷、小野郷、錦部郷、大野郷」をそれぞれ合わせた境界が示されていることである。注目すべきは、その南と西の境界を示した「南限皇城北大路同末」と「西限大宮東大路同末」で、いずれも直線の境界となることが分かる。これらに直接関係のあった郷は、おそらく出雲郷や大野郷などで、さらに錦部郷についてもその可能性があろう。

『小右記』によると、この賀茂社への神領の寄進が提案されたのは、寛仁元年（1017）11月25日の後一条天皇による賀茂への行幸時にまで遡る。当時は践祚2年目で、まだ10歳の若さであった天皇への加護を祈るために、母后彰子が発願したものであった。紆余曲折の後に、翌2年の11月25日になって官符が出されたものの、実際に決定されたのは足かけ3年後の同3年7月9日であった。もっとも、上記8郷の土地すべてが賀茂社領となったわけではなかったが、これによって平安京北郊における同社の勢力範囲が一層明確になったことは確かである。同時に、南の境界とされた一条大路は賀茂祭における路頭行列の儀の

道筋、そして西の境界とされた大宮大路末については、斎院の南側が斎王御褖の、また北側が還立の儀のそれぞれ道筋としてより強く印象づけられることとなった。寛仁年間における神領寄進地の具体的な場所決定の背景には、これら賀茂祭の空間的な移動ルートが深く関連していたのである。

## V. 平安京北郊の風景と雲林院

以上、雲林院の発展と衰退過程、その具体的な場所と規模の復原、そしてその持つ意味、雲林院付近を中心として賀茂上社と平安京とを結ぶ道筋の解釈等について考察を試みた。平安から鎌倉時代にかけての雲林院付近には、このほか船岡山や、堀川、有栖川といった小河川、知足院や斎院など古記録や文学作品に登場する場所が見られた。そうした平安京北郊における過去の風景を正確に把握するためには、さらに詳しくこれらの場所の詳細な復原や、それぞれの景観が持っていた意味を考察する必要がある。それらの具体的な解釈については別稿に譲り、ひとまず筆を擱くこととしたい。

### 注・参考文献

- 1) 杉山信三「雲林院と知足院」、(杉山信三『藤原氏の氏寺とその院家(奈良国立文化財研究所学報 19)』、吉川弘文館、1968、所収)、107-112 頁。
- 2) 柴田 実「雲林院の菩提講」、古代文化 26-3、1974、117-126 頁。
- 3) 京都文化博物館学芸第二課(鈴木忠司)編『雲林院跡 京都文化博物館調査研究報告 第 15 集』、京都文化博物館、2002、216 頁+図版。
- 4) 川口久雄校注『菅家文草 菅家後集 日本古典文学大系 72』、岩波書店、1966、442-443 頁。
- 5) 川口久雄校注『菅家文草 菅家後集 日本古典文学大系 72』、岩波書店、1966、443 頁。

- 6) 川口久雄校注『菅家文草 菅家後集 日本古典文学大系 72』、岩波書店、1966、624-625 頁。
- 7) 塙 保己一編『群書類従 第 128 (第 9 輯)』、続群書類従完成会、1958、1-129 頁。
- 8) 川口久雄・本朝麗藻を読む会編『本朝麗藻簡註』、勉誠社、1993、162-166 頁。
- 9) 新修京都叢書刊行会編『山城名勝志 新修京都叢書 14』、臨川書店、1969、40-41 頁。
- 10) 少なくとも平安時代の前期～中期にかけて、船岡山や雲林院・斎院の付近も「北野」の領域に含まれていた。それは、第 1 表の記録 3、7、10、17 や第 2 表の番号 2、24、26、32 などから知ることができる。また表にはないが、康保元年(964)2月5日の『日本紀略』および『栄花物語』(巻 1、月の宴)、正暦 5 年(994)6 月 27 日の『本朝世紀』などによっても明らかである。
- 11) 「朝観行幸」とは、天皇が父親である上皇(法皇)に年始の挨拶に向向くという行事で、本来は、天皇が父親に対する孝敬を示す儀礼だった。しかし平安中期になると、摂関家が天皇の妃にした自家の娘(女院)に対して朝観行幸を行わせるようになっていった。
- 12) 森本 茂「雲林院」、平安文学研究 26、1961、141-143 頁。
- 13) 小山利彦「雲林院と紫野斎院」、(角田文衛・加納重文編『源氏物語の地理』、思文閣出版、1999、所収)、209-237 頁(初出は「源氏物語における雲林院と紫野斎院」、平安文学論究 13、1998)。同『源氏物語と皇権の風景』、大修館書店、2010、75-137 頁。
- 14) 加納重文「史料にみる雲林院」、(京都文化博物館学芸第二課(鈴木忠司)編『雲林院跡 京都文化博物館調査研究報告 第 15 集』、京都文化博物館、2002、所収)、191-197 頁。
- 15) 小原 仁『中世貴族社会と仏教』、吉川弘文館、2007、136-159 頁。
- 16) 袴田光康『源氏物語の史的回路—皇統回歸の物語と宇多天皇の時代—』、おうふう、2009、248-280 頁。
- 17) 例えば、田中徳定「雲林院の菩提講と無縁聖人—今昔物語集巻十五の出版未詳話をめぐって—」、駒澤国文 20、1983、129-139 頁。小峯和明「大鏡の語り—菩提講の意味するもの—」、国文学研究資料館紀要 12、1986、59-79 頁。同「大鏡の語り—菩提講の光と影—」、文学 55-10、1987、125-139 頁。根本智治「光源氏の雲林院籠り」、中古文学 44、1990、19-28 頁。広瀬唯二「歌語「このかもの」と光源氏の雲林院退出一源氏物語の場面と引き歌」、武庫川国文 68、2006、9-15 頁。土方洋一「雲林院の紅葉—『源氏物語』賢木巻の和歌的表現—」、青山国文 41、2011、11-19 頁。など。

- 18) 東大寺の西塔は、『日本紀略』承平4年(934)10月19日条に「東大寺西塔并廊、為神火被焼」とあり、落雷によって焼失していたことが分かる。
- 19) 「村上天皇供養雲林院御塔願文」巻13-402(大曾根章介ほか校注『本朝文粹 新日本古典文学大系27』、岩波書店、1992、所収)、252-253頁。
- 20) 須磨千穎『賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究』、法政大学出版局、2001、288-307頁。
- 21) 前掲20)、667-668頁。
- 22) 川上 貢『禅院の建築(新訂)』、中央公論美術出版、2005、139-260頁。
- 23) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題(四)』、赤尾照文堂、1984、14-49頁。日高愛子「京都府立総合資料館蔵『古今集注』翻刻と解題(一)」、文献探究45、2007、22-49頁。
- 24) 『新編国家大観』編集委員会編『新編国家大観CD-ROM版Ver.2』、角川書店、2003による。
- 25) 原文は、『早稲田大学図書館古典籍総合データベース』(請求記号:文庫30 d0065、『古今栄雅抄(五六秋下)』)によった。
- 26) 『延喜式』巻42、「左右京職」の「京程」による。
- 27) 辻 純一「条坊制とその復元」、(古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』、角川書店、1994、所収)、103-116頁。
- 28) 太田静六『寝殿造の研究 新装版』、吉川弘文館、2010、114-143頁。
- 29) 加納敬二「円宗寺跡」、(京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都市埋蔵文化財研究所、1989、所収)、129-137頁。平田 泰「円乗寺跡」、(京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都市埋蔵文化財研究所、1991、所収)、100-102頁。
- 30) 米倉二郎「山城の条里と平安京」、史林39-3、1956、27-35頁。
- 31) 金田章裕「郡・条里・道路」、(古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』、角川書店、1994、所収)、399-410頁。
- 32) 藤岡謙二郎「古代の大津京城とその周辺の地割に関する若干の歴史地理学的考察」、人文地理23-6、1971、1-15頁。
- 33) 角田文衛「愛宕郡と山代国造家」、(角田文衛『角田文衛著作集2』、法蔵館、1985、所収)、14-32頁(初出は『古代文化』27-10、1975)。
- 34) 岸 俊男「山背愛宕郡考」、(竹内理三古稀記念会編『続律令国家と貴族社会』、吉川弘文館、1978、所収)、261-290頁。
- 35) 前掲20)、469-862頁および付図。
- 36) 前掲20)、469-479頁、665-751頁。
- 37) 大塚 隆編『慶長 昭和 京都地図集成』、柏書房、1994。
- 38) 前掲20)
- 39) 『延喜式』巻9、「神祇9、神名上」による。なお久我神社は、近世初期頃には「氏神」の名で呼ばれていた。
- 40) 片平博文「京都を襲った歴史時代の洪水—9～14世紀を中心に—」、(立命館大学文化遺産防災学「ことはじめ」篇出版委員会『文化遺産防災学「ことはじめ」篇』、アドスリー、2008、所収)115-127頁。
- 41) 「円融院御子日参曾彌古忠語」(巻28-3)による。森正人校注『今昔物語集5 新日本古典文学大系37』、岩波書店、1996、192-194頁。
- 42) 増補史料大成刊行会編『小右記1 増補史料大成別巻』、臨川書店、1965、56-57頁。
- 43) 「野口」の地名はそのほか、『古事談』巻1-15、や『北山抄』巻8大将儀、「野行幸」の項目にも見られる。
- 44) 井上光貞・大曾根章介校注『往生傳・法華驗記 日本思想体系7』、岩波書店、1974、646頁。
- 45) 増補史料大成刊行会編『兵範記1 増補史料大成』、臨川書店、1965、337-338頁。
- 46) 角田文衛「紫野斎院の所在地」、(角田文衛『源氏物語千年記念 紫式部伝—その生涯と『源氏物語一』、法蔵館、2007、所収)、530-550頁(初出は古代文化24-8、1972)。
- 47) 『中右記』大治2年(1127)4月6日条には、「斎院次第、嵯峨御時智子内親王、嵯峨第九子、作詩賦人也、弘仁九年初置斎院司自斯始」とあり、この内容は『日本紀略』弘仁9年5月22日条に、「始置斎院司宮主一員、長官一員、次官一員、判官一員、主典二員」と明記されている。
- 48) 所 功『京都の三大祭』、角川書店、1996、46-111頁。
- 49) 同太政官符は、『類聚符宣抄』第1「被奉公郡於神社」にもある。